

探求の方法としての比較思想

沖 永 宜 司

はじめに

比較思想の方法を問い直すためには、何のために思想の比較を行うのかをまず反省する必要がある。洋の東西を問わず、オリジナルな思想家の多くは、比較思想家であった。たとえばカントの批判哲学がそうであったように、独創性とは恣意性ではなく、さまざまな思想の潮流の中から、時代や学問領域の要求する問題解決にふさわしい思想を抽出し、接続していく試みであったからである。そこでまずは身近な事例として、日本近代の哲学者を、比較思想家という観点から捉え直してみたい。彼らが抱えていた問題意識を確認し、その思想形成の過程でどのような比較思想的な方法が採られたかを探り、その結果何を生み出したかを確認することから始めたい。

一 日本近代の思想家と比較思想の方法

日本に住まう私たちが比較思想の方法を反省するにあたり、日本近代の思想家がどのように比較と言えるような東西の思想の取り扱いを行ってきたかを見直す必要がある。典型的な例としてまず、西田幾多郎（一八七〇—一九四五）を比較思想家として見直す作業から始めたい。彼の中に、現在の私たちが比較思想の方法論的見直し行う道標があると思われるからである。

彼の原初の問題意識は、「私は何の影響によったかは知らないが、早くから実在は現実そのままのものでなければならぬ、いわゆる物質の世界という如きものはこれから考えらえたものに過ぎない」という考を有¹⁾っていた。『善の研究』の言葉に集約される。それは私たちが前提にしている、観察不能な物質の単位や、反対に觀念の単位を実在と見なす考えを一

度解体することであり、この解体があつてはじめて「現実そのまま」が実在となり得る。

そうしてできた西田前期の思想である「純粹經驗」は、「主客未分」ということで知られている。だがW・ジェイムズからは、その根本的經驗論の「意識は存在しない」というテーゼにおける、実体的自我がなく、かつ客観性のみを実在としないという見解を受け継ぎ、G・T・フェヒナーからは「昼の相」と「夜の相」、つまり実在の世界とその単なる一面としての物質の世界という考えを受け継いでいる。またヘーゲルにおける絶対精神の自己展開は、実在の自発自転に結びつき、原坦山の『大乘起信論』講義からは、現象即実在論を受け継ぎ、そこには人間と天地とを同一に見る宋学思想があつた。この「同一」は場所的な一元論にもつながっていった。

中期の「場所」は、アリストテレスの「判断の主語となつて述語とならないもの」⁽²⁾という実体の定義を、西田が「述語的なものが基体となる」⁽³⁾形に逆転させたものと言われる。しかし実際は、英国新ヘーゲル主義のB・ボサンケの、「判断の真の主語」「意識の全世界」といった世界の全体を常に個別の主語の背後に見る考え方からも影響を受けている。西田はこの主語の背後の世界を、主語ではなく「究極的超越的述語的なもの」と理解し、しかも実在ではなく「無」と言い換えた。また、唯識や禅における鏡の比喩は、西田中期の「見るもの」を象徴させ、事物はこの「無」としての鏡に映し出されることになる。

西田が撰取していったこうした東西の諸思想は、ただ並列的に比較されたのではなく、西田自身の理念を実現するため、自らとの対決を通してひとつの道筋を構築するために用いられた。西田の試みは諸思想の比較ではなく、諸思想同士を対決させ、自らの内に内面化し、新たなものを練り上げる過程のプロトタイプであつたと言える。

西田を典型とする日本近代の思想家では、問題意識とその解決が優先課題になっており、比較は目的ではなくその手段であり、そしてその結果としてオリジナルな思想が生まれた。従つて何かの問題解決のため、思想の比較を通路としていかに用いたかに着目することが、比較思想の方法論の反省に必要である。それは、思想展開に弁証法的契機を与える方法としての比較思想であり、問題解決への手段としての比較思想である。

二 自然の存在領域を再構築するための比較思想

次に、自然科学的な世界把握における哲学的な問題への対処のために要求された、思想の比較の姿を見たい。これは、自然科学で観察される現象がどのような存在論的な枠組みで扱われたらよいか、という問いから生じてくる比較思想的な考察である。哲学は現象そのものの観察ではなく、現象がいかなる概念枠によって説明され扱われるべきかを考察する学問と言えるが、新たな性質の現象はこの枠の改変を要求する。その際は新たな現象と照らして、古典的な概念枠のどの点を改変すべきか

が明らかにされる必要がある。この際、現象と従来の諸思想とが、様々に比較、対決されることになる。

ここでまず、精神医学上の現象が、哲学的考察を要求した例として、木村敏（一九三一）の思想を参照したい。木村は臨床上の具体的な精神医学的問題も多く扱っているが、特に哲学的概念枠に関わるものとしては、生物学的精神医学と精神病理学との葛藤がある。神経科学は意識を脳活動として、物質的三人称的に見る傾向があるが、それに対して一人称的、主体的、主観的あり方としての「生きること living」をどのように位置づけるかが木村の問題意識としてあった。彼は物質としての脳は神経科学の専門用語の行使によって成立し、反対に純粹に主観的な精神は哲学的現象学の用語の行使で成立するが、living はそれらのどちらでもないという。

ここで主張されるのが、世界と意識との共鳴としての〈あいだ〉である。これは自己と他者との〈あいだ〉、患者と世界との〈あいだ〉という使われ方で広く知られているが、概念枠の改変という意味で重要なのは、この脳と意識との〈あいだ〉である。生命の働きとは脳状態でも純粹な内的状態でもなく、有機体と環境との接触面に成立するという。それは一人称的、内的主体と、外的な生命環境との〈あいだ〉に作り出される「接触」⁴としての生命観である。ここからすると、意志の決定論は客観主義を前提とし、反対に決定性を破る自由意志は、客観世界に対する内的世界という二元論的構図を前提していることに

なる。「接触」はそのどちらでもないのである。

さらに木村は精神病理学的にも統合失調症の原因を、〈あいだ〉による trans-individual な響きの共鳴に異常をきたすこととして考える。そして西田の「自覚」を、この共鳴状態の成立として解釈する。「世界が自覚する時、我々の自己が自覚する。我々の自己が自覚する時、世界が自覚する」という西田の言葉⁵を木村も着目する。この世界の自覚と自己の自覚とが重なっているという思想は、自己と他者、自己と環境世界との、精神状態としての安定した共鳴を意味するとともに、「自覚」が主観と客観という二項対立的な枠を超えたところに成立するという考えを示している。

次に、生物学の領域で「生命とは何か」が哲学的課題として問題になる際に現れてくる比較思想の姿を参照したい。生命は物質からできている限り、生物学的現象は化学現象として、さらにそれは物理現象として説明できるはずだという考え方がある。しかし、そうした要素還元的に説明しづらい生命現象が存在し、それをどう扱うかが議論されている。それは、生命論に物理学の「線形理論」を持ちこめるかという議論であり、それに対して比較思想的な方法を用いながら批判的な立場をとったものに、清水博（一九三二）の「場の思想」がある。「線形理論」は要素主義的、因果的で、対象論理によって理解されるが、清水はそれによって扱い切れない生命の特性を、西田哲学、仏教思想を取り入れながら追及し、「統合の場」「存在の願い」

として生命を呈示する。

生命は環境から独立した要素ではなく、生命とは「居場所としての(いのち)」、「居場所に広がって遍在的に存在する」ものであって、それは「生きものの(いのち)」を加え合わせたものでさえないという。しかも「居場所の部分である生きものたちの内部には、それぞれ居場所全体の(いのち)の活き(＝場)：を映す活き「コペルニクスの鏡」があ^⑤るとい^⑥う。これは「個」と「居場所」という、もともと互いに独立したものが相互関係に入ることではなく、「個」はもとから存在として「居場所」とひとつであり、それゆえ各々の「個」には皆、「居場所」全体がすでに有機的に含まれることになる。また、「個」が「居場所」である限り、観察者もこの複雑系から独立していない。これは観察者を独立させることで純粹客観を実在と見なした近代科学とは大きく異なる点である。

さらに清水は、J・S・ホルデーンの「化学的生物学の公理」を参照しつつ、生命の「活き」を展開する。これは、生命は環境に一方的に基づけられるのではなく、自ら環境の一部として環境を形成していくという思想である。「生きものがある場所と整合的に生活すれば、その場所もまたその生きものの生活に整合的な状態になり、生きものと場所の間に相互整合的な状態が成立する。「生きものは(いのち)の能動的な活きによって、この相互整合的な状態を維持していく」^⑦。これは、環境にたまたま適応した種が生き残るよう、自然の側から選択されるとい

うダーウィニズム的な考えにも対立する。ダーウィニズムは環境からの一方的な基づけであるのに対して、「活き」は環境を積極的に作り変える生命の能動性、即興性の肯定だからである。この考えと、「個」がすなわち「居場所」であるという考えを融合させると、環境が自らを能動的に形成するという、予測不可能性の議論が生じる。線形性は客観的観察可能で予測可能だが、「活き」は観察者自身が「居場所」に巻き込まれ「主客未分」なため、それらが不可能だからである。

この予測不可能性との関係で展開されるのが「因の論理」である。観察者自身が「居場所」の外部から現象を観察して、結果を予測できるのが、「因」とは反対の「果の論理」である。ここでは時間がすでに形式化されており、時間自体が生成することはない。それに対して「因の論理」は「時間を生成できる創造的な活き」^⑧、として「物語」を生み出し、そこで「存在と意味」とが合致するという。決定論的シナリオと対立する「即興劇」とはこの謂いであり、そこからすると「主客分離」された世界の方が、人工的に隔離された「鳥宇宙の唄」の中にあるという。自発的創造の世界が、機械的客観世界の中の鳥宇宙なのではなく、後者が前者の中の鳥宇宙だということである。

機械的客観世界が鳥宇宙にすぎないといっても、物質の基本単位の運動は線形的に定められ、私たちはその集積である限り、物事は決定され、客観的に予測されるのではないか。こうした哲学上の疑問に対して、物理学の領域から応答しようとし

たものに、たとえば山田廣成（一九四六¹⁰）の研究がある。山田の問題意識は、物理学の立場から、量子の性質や振舞いを経験的に記述し、他方ではそれと「意志」を持った生物の行動の性質との共通点を見出すことで、「存在、意志、生命の意味」を解明することである。

ここで山田が呈示する両者の共通点は、「個体を統合する」「他者から己を識別する」「他者と対話し干渉を起こす」「振る舞いは、確率統計原理に従う¹¹」ことである。特に最後の点は、決定論的な予測の不可能を意味し、それを山田は「確率的な選択が生じたことを「意志」と呼ぶ¹²」と定義するのである。このように「意志」を電子の世界にまで拡大するが、それは電子の内面性を見ることではなく、客観的性質の側から生物の「意志」との類似性を見出すことなのである。

では「意志」の要としての予測不可能性はどうして導かれるのか。山田が着目するのは電子の振る舞いである。それは電子一個が通るチューブに等間隔的に電子を通した場合、電子が個性のある振る舞いを生み出す現象である¹³。線形的にはこれ以上の因果的な原因が考えられないレベルにおいて、個々別々の振る舞いが生じることには、線形性、決定性の破れを認めざるを得ないということである。

さらに「他者」との「対話」と「干渉」については、一つずつの電子が、二つのスリットがある板を通過後に、結果的に干渉模様を作るといふ量子力学の実験が引き合いに出される。こ

の干渉模様は、二つのスリットを一つの電子が同時に通過したからできたというのが従来の解釈だった。これでは一つの電子が二か所以上に同時に存在することになる。それに対して、電子はスリットが二つあることを、他の電子との「対話」によって「認識」して、どちらか一方を選んだから干渉模様がでる、と山田は解釈する。ただしこれは、山田が電子は波ではなく粒子とする立場をとることから導かれる解釈である。これが山田の、多層から成る諸「意志」の「対話」が、すべて未来の創造に参与するという「対話原理」の基礎であり、ここに弁証法モデルとして採用される。単一の原因や運動が未来を決定すれば、予測可能な世界であるが、弁証法的対話の世界ではすべての「意志」が未来の創造に寄与するので決定や予測が成り立たない。こうした「意志」の弁証法モデルが、物質世界のモデルにもなっている¹⁴。

もちろん、「意志」や「対話」という人間にとって妥当する概念を、素粒子の領域に持ち込むのは筋違いだという反論は予想される。しかし、「意志」や「対話」という概念が何を含意しているかを分析し、そこに人間でも素粒子でも共通する性質があるのなら、両者に共通してこれらの概念を用いることが相応に妥当するというのが、山田の考え方だと思われる。

おわりに

比較思想の展開には、何のための比較かを念頭に置く必要が

あり、本論では主にそのふたつのタイプを確認した。

① 哲学、思想上の基本的な問題解決に資すること。問題解決は、特定領域の細分化よりも、他領域との対話からなされる場合がある。思想の場合はこれが顕著である。

② 哲学分野に限らず、根本的に異なった概念領域、存在領域間の対話を行うことで、分野間の垣根を払い、新たな概念を弁証法的に創出すること。

第一点については、特定の問題意識から東西の諸思想と対話、対決し、結果としてオリジナルな思想を生み出した思想家(西田)の方法を見た。第二点については、自然現象そのものへの洞察を通じて、自己と世界(木村)、生命と物質(清水)、量子と意志(山田)を異なった存在領域と見なす従来の考えを解体し、存在領域つまり概念的区分の垣根を取り払う試みがなされていた。そしてそこに、哲学の諸思想を取り入れる試みがなされている。こうした存在領域や概念区分の枠を取り払うことで新たな概念を創出し得る対話的方法が、今後の比較思想のモデルのひとつになると考えられる。

- (1) 西田幾多郎『善の研究』岩波文庫、二〇一二年改版、一〇頁
- (2) 『西田幾多郎哲学論集I』岩波文庫、一九八七年、九五頁
- (3) 同書、一二二頁
- (4) 『木村敏著作集 8 形なきものの形を求めて』弘文堂、二〇〇一年、二九〇頁
- (5) 『自覚について』『西田幾多郎哲学論集III』岩波文庫、一九八九年、二六二頁

(6) 各々の「個」を持つ「コペルニクスの鏡」には、全体の(へのち)の活きが各々映され、各々の「個」の性質を内部から変えるという(清水博『へのち』の普遍学』春秋社、二〇一三年、一一頁)。

(7) 同書、三三頁

(8) 同書、五五頁

(9) 同書、六一頁

(10) 山田廣成「量子力学が明らかにする存在、意志、生命の意味」光子研出版、二〇一一年では、立命館大学放射光生命科学研究所センター長、超伝導、X線放射光装置開発を専門とし、一九九三年科研費基盤A獲得、二〇〇二年COE拠点リーダー、二〇〇三年基盤S獲得、二〇〇七年文部科学大臣賞受賞と紹介されている(一七四頁)。

(11) 同書、三八頁

(12) 同書、五一頁

(13) 同書、二二頁「ほかにB.E.Kane et al. "Quantized conductance in quantum wires with gate-controlled width and electron density", *Appl. Phys. Lett.*, vol.72, 3506-8, 1998 などの研究を根拠とする。

(14) 山田、前掲書、九七頁。電子の粒子性と意志については、Hironari Yanada, "Some Comments on the Real Meaning of Schrödinger's Equation Revealed by the Fact that Electron Is Always a Particle", *Journal of Quantum Information Science*, 2012.2, 112-118.

量子論での自由意志に「うづな」John Conway; Simon Kochen, "The Free Will Theorem". *Foundations of Physics*, 36(10), 2006. など。

(15) 生命の物質性に対して山田は、「勢い生命科学もニュートン力学的機械的な生命観に陥る。…蛋白質の本質を知るには、蛋白質間の対話について知ることが鍵である。量子力学の真の意味を理解して、生命の真の意味、蛋白質の意味、DNAの意味にアプローチしなければならぬ。」と言う(山田、前掲書、一〇六頁)。

(おきなが・たかし、哲学・宗教学、帝京大学教授)